

常州觀莊趙氏の歴史にみる清代社会の一断面（9）

浅 沼 かおり

9. その後の趙園

2019年現在、江蘇省常熟市の環城西路に「趙園」と呼ばれる庭園があり、隣接する「曾園」とともに一般に公開されている。



図 9-1 趙烈文（「趙園・曾園」説明書）

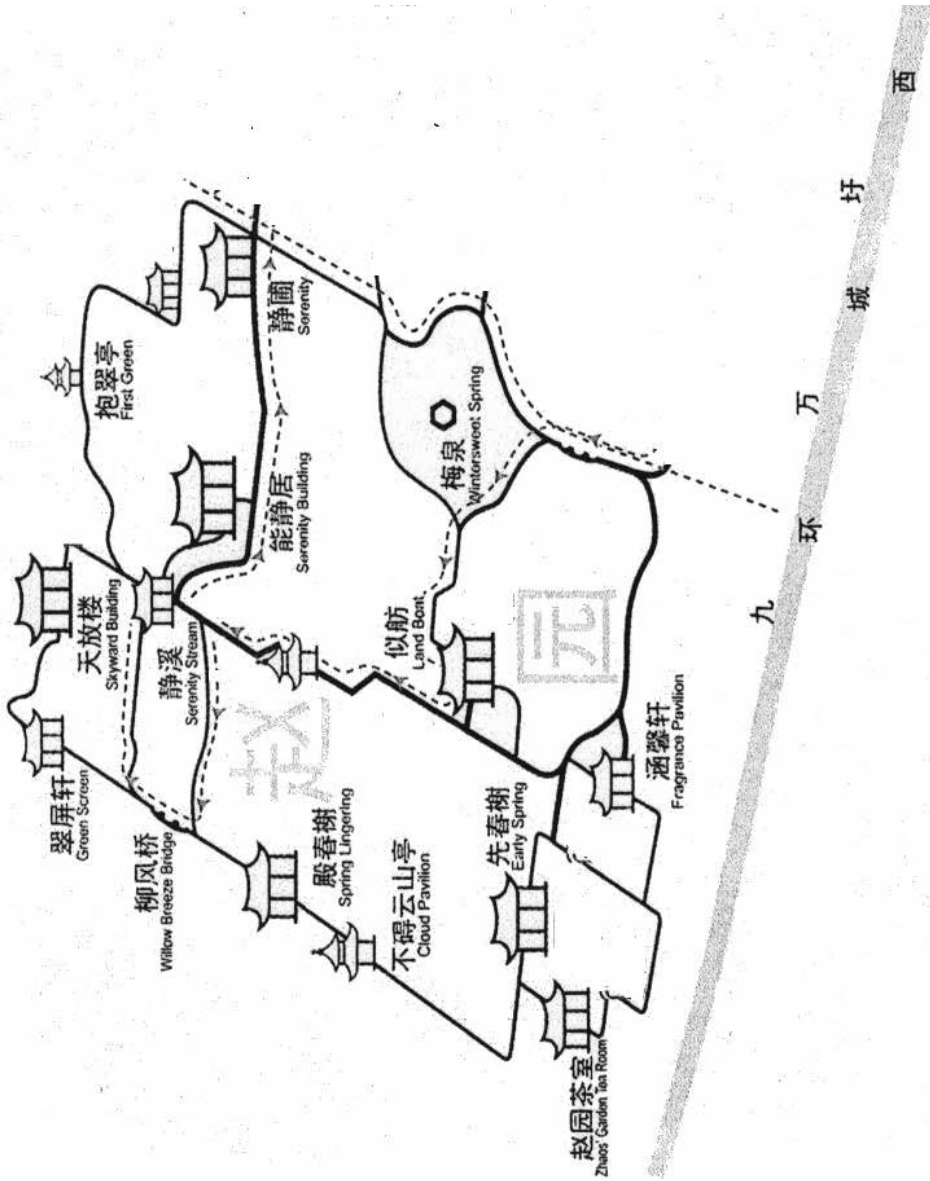


图 9-2 今日の趙園（「趙園・會園」説明書に筆者が手を加えたもの）

『常熟国家歴史文化名城詞典』(以下、『詞典』と略記)は、趙園を次のように紹介している。

同治・光緒年間、この園は、官を辞し常熟に寓居していた陽湖人・趙烈文のものになった。趙烈文はこの園を修理して、「天放楼」、「能静居」、「柳風橋」、「静溪」、「梅泉志勝」、「似舫」(石船を指す、引用者)、そして築山を二つ造った。江南の名園となり、「趙園」「趙吾園」「趙壺園」と呼ばれた。(中略)園内は池を主体としており、名所〔景点〕はすべて池の周囲に造られている。様々なものが入り交じり〔参差錯落〕、自然に呼応し、適切に配置されている〔得体〕。園全体は南から北に向けて、四つの区に分かれている。東門の入り口のところが第一区である。三つの中庭をもつ〔三進院落〕「能静居」を主要建築としており、西に延びる長廊は「先春」という名である。この長廊には高殿〔榭〕がひとつあり、西には経堂が5間あり、さらに西は「殿春」という名の長廊である。この長廊は折れて北に向かい、池に面して塀〔围墙〕に沿って築かれている。殿春廊には二階建ての八角亭形の高殿〔閣〕と方形の楼閣〔台榭〕が造られている。「能静居」から東北に向かうと第二区である。「似舫」と「梅泉志勝」を主としている。石船〔石舫〕の北は池に面している。石舫の南では柳が浪に舞い、ここは「舫栖浪」と名付けられている。小さな峡谷のところで曲がると、そばには太湖石の築山が一つある。折れて東にいくと、また一つ黄石の築山がある。なだらかな小山〔平岡低坡〕には、もともと亭があった。亭はなくなったが、石でできた井戸枠は残っており、名を「梅泉」という。趙氏が光緒10(1884)年に書いたもので、これがすなわち「梅泉志勝」である。近くには桧柏が3株あるが、これは明代の「小輞川」*¹の遺物である。石船からは、北に虞山の美しい姿を眺めることができ、眼前には先春廊〔西長廊〕が波のうえに横たわっている。遠山近水、絶景である。石船から北に向かうと第三区、すべて水景である。池は広々として、九曲の石橋がかかっている。南は石船に通じ、北は池に面した小山〔平岡〕と築山に達する。さらに北にいくと、第四区である。西には一つ穴の石橋「柳風橋」と、西に通じる臨水の長廊がある。橋の下の水は城河から引き込まれており、「静溪」と称する。溪の北には「天放楼」*²がある。これは趙氏の蔵書楼であった。溪の南には築山がそびえ、築山の西では石橋〔石梁〕が柳風橋とつながっている。築山の南では九曲石橋が水を横切っており、この橋には石のテーブルと椅子がある。中華人民共和国成立後に常熟師範、蘇州地区師範、常熟高専などの校舎になったとき、先春廊〔西長廊〕が改築され〔重作構建〕、園の東部にも改築されたところがあるが、全体の配置は基本的に変わっていない。天放楼と能静居は現存していないが、池に沿った主要な名所である九曲橋、石坊(石舫の誤りか、引用者)、築山、梅泉志勝、殿春廊、静溪、柳風橋などはその大部分が保存されている*³。

何度読み返しても、上の説明と、図9-2が示す今日の「趙園」とは一致しない。蘇州の名



図 9-3 趙烈文の書いた「梅泉」の字 (2019年3月29日筆者撮影)

園「怡園」の主人である顧文彬は光緒9年に静圃を訪れているが、そのときの『過雲樓日記』には、次のように書かれている。

4月1日 香巖(李鴻裔^{*4}, 引用者)に誘われて趙惠甫(惠甫は趙烈文の字, 引用者)を訪ねる。惠甫は毘陵人で、易州牧をつとめたが、まもなく辞職して、常熟の西門内に移居した。その地は某氏の廢園であった。惠甫は安値でこれを手に入れて、屋敷を建てて[葺屋]住んだ。なかには大きな池があり、庁堂, 書室, 母屋[上房]はすべてその池の南にある。家の背後は虞山である。池は外河に通じている。池の東には石橋が一つあり、さくを境としている。池の北には楼と亭榭があり、長い板橋が往来に通じており、塀はなく、槿をかきねにしている。手植えのノニレ、ヤナギなどが空に届かんばかりである。地(池であろう, 引用者)には、ハス、菱[芰, 菱], オニバスがいっぱい、すこぶる深遠の感がある[幽曠]。私と香巖は、夕暮れまでぶらぶらして[盤桓]帰った。惠甫の詩, 古文, 詞はいずれも佳い。とくに金石に造詣が深く、集めた金石の拓本を10冊あまり見せてくれた^{*5}。(下線, 引用者)

上の引用中の下線部のように、「庁堂, 書室, 母屋[上房]はすべてその池の南にある」はずだが、今日の「趙園」では能静居は池の北にある。「趙園」の殿春廊に掲示された説明(「水吾清話」のなかの「建国後の歴史沿革」)によると、趙園と曾園は1952年から学校や役所によって使用されていたが、1992年5月に曾園が、1999年2月に趙園が常熟市政府に引き渡され、2003年8月から2004年12月にかけて修復された。修復を終えた趙園・曾園が合併して公開されたのが2005年1月、『詞典』が出版されたのは2003年10月である。つま

り、『詞典』が紹介しているのは修復前の姿であったことがわかる。『詞典』の説明にあるように、天放楼と能静居は残っていなかったのが再建されたものであるが、能静居は池の南でなく北に造られたのだろう。

上の引用中にもう一つ下線を付した「安値」というのは、前節で述べたように趙烈文がわずか100緡（およそ銀54両）でこの土地を手に入れたことを指している。盛宣懐の父・盛康が光緒2年に蘇州で「劉園」（のちの「留園」）を入手した時の価格は5650両であった^{*6}。前節でふれたように顧文彬は「白銀20万両」を投じて怡園を築造した人である^{*7}。顧文彬にとって、趙烈文の静圃は「ただ」のようなものであっただろう。池はハスだの菱だので覆われ、「すこぶる深遠の感がある」と顧文彬は書いているが、あんまり田舎^{*8}で驚いたというのが正直なところではないだろうか。顧文彬の怡園は蘇州城の中心部にある。浙江省で「道具」（正四品）をしていた顧文彬は、ちょうど趙烈文と同じ光緒元年に官を辞して隠居生活を始めていた。趙烈文の側からすれば、20万両もの銀がどこから来たかと考えると、顧文彬に対して心中穏やかならざるものがあつたに違いない^{*9}。前節で述べたように、趙烈文は顧文彬の怡園について、『能静居日記』^{*10}（以下、『日記』と略記）のなかで、「狭く苦しい〔逼窄〕のが良くない。目の遣り場〔送目処〕がない」（G12/10/22.2282）などと「けち」をつけている。負け惜しみの感は否めないが、趙烈文は広々とした庭園を好んだのであろう。白幡洋三郎氏は著書『大名庭園』のなかで「池の上部にはさえぎるものがない。雄大な空が広がっているだけである」^{*11}と池の効用を指摘されているが、趙園も大きな池のおかげで開放感がある。

以下では、「趙園」とゆかりの深い二人の文人と、それぞれの一族について紹介したい。趙園とそこに暮らした人々は、彼らの生涯に大きな影響を与えている。一人は鄧邦述である。

『清代翰林伝略』によると、

鄧邦述（1868-1939）、字・正闇、号・孝先、江蘇江寧（現在の南京）の人。（光緒24（1898）年戊戌科、引用者）二甲59名進士、散館して編修を授かる。のちに端方の幕府に入る。会試同考官をつとめ、海外で視察調査にあたった。1907（光緒33、引用者）年に吉林民政使となった。辛亥（宣統3（1911）年、引用者）後は北京、天津に10年間住んだ。晩年は蘇州で暮らし、書画を楽しんだ。書は玉箸篆（書体の一つである小篆、引用者）に長じ、山水画もできた。清末明初の大蔵書家であり、その蔵書楼は羣碧楼と称した。没後、その蔵書はばらばらになった。著述をよくし、『羣書楼善本書録』『羣玉詩集』などがある^{*12}。

鄧邦述の祖父は第三節に登場した鄧廷楨の三男・鄧爾咸であり、その息子の鄧嘉縝（字・季垂）^{*13}が鄧邦述の父である^{*14}。趙烈文の妻・鄧嘉祥^{*15}は鄧廷楨の次男・鄧爾頤の娘なの

で、鄧嘉祥にとって鄧邦述は、従兄弟の息子である。趙園の殿春廊に掲げられた説明（「水吾清話」のなかの「鄧邦述与趙園の一段佳話」）は、次のように伝えている。

光緒年間、家が没落して読む本がなくなってしまった一人の書生が常熟にやってきて、指腹（胎内にあるうちから婚約すること、引用者）の岳父である趙烈文のもとに身を寄せた。貧乏書生は、趙園で上下をあげて温かく迎えられた。書生は天放楼の一角を借りて苦学した。趙園の令嬢は有名な才女であって、琴・碁〔棋〕・書・画、できないものはなかった。令嬢と書生は互いを姉弟と呼び合い、文章を磨きあい、音韻を研究し、ともに勉強した。試験が近づくと、令嬢はこっそり嫁入り道具を質入れ〔典売〕して、書生が殿試を受けに上京するための旅費にした。書生も皆の期待を裏切らずに合格した〔取得了功名〕。彼がすなわち近代の文人〔文学家〕鄧邦述であり、その夫人は趙家の令嬢・趙宛である。鄧邦述は読む本がないという苦勞を味わったので、いっそう本の尊さを感じて、蔵書を志した。夫人の心からの助けのもと、のちに蘇州に蔵書楼「羣碧楼」を創った。二人はいつも趙園の湖光山色を懐かしんでいた。

上に登場する鄧邦述の妻「趙宛」は、第8節にも登場した趙烈文の庶出の娘であり、『日記』では「趙婉」と記されている。この婚約については、『日記』に「鄧伯紫（鄧嘉綬、趙烈文の妻・鄧嘉祥の弟、引用者）の2月某日の手紙を受け取る。我が幼女を季垂の子の嫁にほしいという」（T8/3/7.1243）という記述がある。同治8（1869）年というのは、鄧邦述の生まれた翌年であり、張婉も光緒8年1月28日に生まれている（G8/1/28.2060）から、正確には「指腹」ではない。鄧邦述は「22歳のとき虞山で結婚した」*16と記しているので、結婚したのは光緒15（1889）年であった。趙烈文が亡くなるのは光緒19年なので、鄧邦述は最晩年の岳父と数年間、生活を共にしたことになる。この結婚は、後述のように「入贅婚」であつたらしい。

鄧邦述は蔵書家として知られている。その背景には第一に、先祖伝来の蔵書が失われたという事情があった。南京の人で、辛亥革命後に常熟に寄寓した宗舜年*17は、「清・咸豊癸丑の変（咸豊3（1853）年に、太平天国は南京を占領して天京と改めた、引用者）により、旧家の文物は地をはらった。（中略）鄧氏・旭（中略）の所蔵はすべて劫火に焼き尽くされた。（中略）わが友である鄧君・正閻は、元昭先生の正統〔嫡嗣〕であり、青藜閣代々の所蔵を守れなかったので、収書を志した」*18と述べている。鄧邦述の祖先である鄧旭（字・元昭）は清・順治4年丁亥科の進士であり、官を退いてから南京に住んだ*19。鄧家には青藜閣蔵書があつたが、太平天国の戦災で焼けてしまったのである*20。

第二に、岳父である趙烈文の影響である。「妻の父である能静趙先生（趙烈文、引用者）は天放楼を築き、数万巻の蔵書があつた。見たことのない書籍を読むことができた」*21と鄧邦述は述べている。金暁東氏も、鄧氏の蔵書の誕生には、「虞山の蔵書家・趙文烈も影響を

与えている。光緒15(1889)年、鄧氏は趙氏に入贅し、趙氏の天放楼の蔵書を読み、薰陶を受けた」と述べている^{*22}。『中国近現代人名大辞典』によれば、鄧邦述は「岳父の影響を受けて蔵書を志し、借金をおしまずに高値で善本を買いあさった。羣碧楼(後述、引用者)の蔵書は4万巻近く、そのうち千巻あまりが宋刻本であった」^{*23}。趙烈文の天放楼では「宋元版本には気づかなかった[懵然未之覚也]」^{*24}と鄧邦述は書いている。趙烈文も宋版の書を所蔵していなかったわけではなく、第8節でふれたように、元旦には曾國藩の肖像に供えることにしていた(G4/1/1.1845)。鄧邦述がのちに宋版を集めたのは、このころの物足りない思いも手伝っていたかもしれない。

第三に、端方のもとで働いたことである。端方(1861-1911)は満洲正白旗、字は午橋、号は匋齋、湖北巡撫、湖広総督、両江総督代理などを歴任した人物である。1905年に載澤^{*25}らとともに出国し政治を視察した。金石書画の蒐集で知られた文人でもあり、江南図書館の創立を支持した^{*26}。金暁東氏によれば、「光緒27(1901)年、鄧氏(鄧邦述、引用者)は湖北巡撫・端方の幕府に入り、匋齋の秘蔵を見ることができ、版本(木版印刷の書籍、引用者)の収集に熱中するようになった。光緒30(1904)年、鄧氏は端方の随員として欧米を歴訪し、政務を視察した」^{*27}。鄧邦述は、端方が江南図書館を創設[籌辦]するのにも協力している^{*28}。

鄧邦述の仕途は順風満帆であった。欧米からの

帰国後は重用され、新官制制定[釐訂]の諸活動に参加した。官途は順調で収入も豊かで、大金を惜しみなく投じて善本(版の優れた古書籍、引用者)を購入した。光緒32(1906)年、鄧氏は上海で、宋代に刊行された、唐の李中^{*29}の『碧雲集』、唐の李羣玉^{*30}の『羣玉詩集』を買った。いずれも士礼居^{*31}の遺物で、鄧氏の蔵書楼は「羣碧楼」と呼ばれるようになった。光緒33(1907)年、鄧氏は東北で吉林省交渉司使代理となり、宣統年間のはじめには吉林民政司使となった^{*32}。政務のかたわら、収書への関心はますます強まった。宣統元(1909)年に職務報告のため北京に赴いたときなどは1万巻近くの本を集め、書籍代だけで借金が2000-3000両となった^{*33}。

東北地方で仕事をしていたとき、鄧邦述は吉林省図書館の成立を促した。吉林省図書館は宣統元(1909)年に設立された。

だが、そうした日々も長くは続かなかった。

鄧氏がまさに得意で、ひきつづき蔵書の規模を拡大しようとしていたとき、辛亥革命が勃発した。役人生活は突然終わりを告げ、収入が断絶した。本を買うために巨額の借金をしていたので、生活はじり貧となり、まもなく「散書易米」の境地にまで落魄した。だが鄧氏の書物に対する愛は衰えることなく、民国元(1912)年、(中略)涵芬楼蔵の

宋本の唐・李咸用『披沙集』^{*34}を購入し、『碧雲』『羣玉』二集と合わせて、三季がそろい、輝きを増した〔交映生輝〕。民国10（1921）年、鄧氏は北京を離れ、江南にもどって生計の道をはかろうとしたが、境遇はついに好転しなかった^{*35}。

「辛酉（民国10年、引用者）の夏、都で暮らすのは容易でない」ので蘇州に戻った鄧邦述は、生計のために南昌や南京を訪れ、丙寅正月（民国15年2-3月）まで門を閉ざして暮らし、「借金をして城南のむさ苦しい小路に家を買ひ、何とか1年暮らしたが、滞納が山積し、ついに火を起こすことができなくなった」^{*36}。民国16（1927）年に「蔵書の大部分を中央研究院に売却して巨額の負債を返済し、羣碧楼を寒瘦山房と改めた」^{*37}。鄧邦述は以前、「昔は借金をして書を買った。今は本を売って借金を返す」と書いたのが、とうとう現実となった。取蔵というのは集めれば必ず散じるものであり、「怪しむに足りない」と記している^{*38}。「四十で書を学び、五十で詩を学び、六十で詞を学び、七十で画を学ぶ」と刻んだ印を作らせて、70歳を過ぎてから、よく得意の作に捺印していた^{*39}。こうした逸話を讀むかぎり、恬淡たるものであった。

以下では、鄧一族のなかで、趙烈文と関わりの深かった人たちについてふれておきたい。他界した岳父・鄧爾頤のために趙烈文が書いた「告文」には、「昔、公は長女〔元女〕を私の妻にくださった。公は自ら妻を送ってきてくださった。そのとき私はまだ幼く、何もわからなかった」（T1/12/6.604）と綴られている。花婿の側が花嫁を迎えに行くのが慣例であったが、貧しい趙家を慮ってのことであろうか、花嫁の父が送って来てくれたのである。鄧嘉祥は豊かな持参金を「すべて家計を助けるために使った」^{*40}という。趙烈文の『落花春雨巢日記』（咸豊2年3月5日）^{*41}の次のような記述からも、鄧嘉祥の実家から贈られたものが非常に多かったことがわかる。

妻の実家である江寧の鄧家から手紙を受け取る。妻の弟である伯紫（名は嘉綬，^{ママ}行一）の結婚〔姻期〕が迫っているのに、納吉（結納を入れたあと、寺廟で吉日を占い、結婚の日と定めて嫁の家に知らせること、引用者）の贈り物が整っていないので、姉の嫁入り道具から、上衣、スカート〔裙〕、毛皮、綿、裕、ひとえ、紗をそれぞれ一揃い、さらに装身具〔首飾〕などをもらって使いたいという。以前、私が、妻・吉止の嫁入りのときの衣物は多すぎるので、妻の父である子期先生（名は爾頤、嶸筠先生の次男、現在は山西吉州知州）に手紙を書いて、半分お返ししたいと書いたので、取りに来るという手紙が来たのである。（括弧は引用者が加えた。原文では嶸が籛と書かれている。）

先述の鄧旭が居を定めたのは南京「城南の万竹園」であった^{*42}。「明朝開国の元勳である中山王・徐達は南京に数カ所の別荘をもち、東園・西園・王府西花園（瞻園）、斑竹園などの邸宅庭園を建造した」が、その「三男である徐繼勳が万竹園を建てた。園内は古木が高く

そびえ、竹林で名高かった」^{*43}。鄧旭はこの万竹園を手に入れたのである。だが、この邸宅は戦災で荒廃してしまった。太平天国陥落直後の同治 3 年 7 月、万竹園の様子を見に行った趙烈文は、

池はまだあるが、家や高殿はすべて荒れ果てていた。奥の部屋は文楠を梁と棟木にしていたが、すかしぼりの衝立はことごとく燃やされていた。土山には老木が 2 株だけ残っており、池の東のサルスベリだけ鮮やかに花を咲かせていた。悲しくて仕方がない (T3/7/26.817)

と嘆いている。その少し前、曾国荃が趙烈文に、「鄧嶰筠（鄧廷楨の号、引用者）先生の遺印を二つ私に渡して、鄧家に返すよう言った」（T3/7/4.808）というが、これは湘軍による略奪の結果、曾国荃のもとにもたらされたものだろう。鄧家の墓所も荒らされてしまった。

嶰筠先生の墓は暴かれ、棺の木の蓋は斧で割られていた。副葬品は多くはなかったが、みんな持ち去られてしまった。遺体はそのままである。痛ましいことで、すぐに何とかするつもりである (T3/7/14.813)。

鄧廷楨には、以下の 5 人の息子がいた^{*44}。

長男・鄧爾恒（字・子久）：陝西巡撫。咸豊 11 年 3 月 22 日に雲南省曲靖府で、副将・何有保とその一味 100 人余りに襲われ落命^{*45}。

次男・鄧爾頤（字・子期）：趙烈文の妻の父。山西省絳州直隸州知州。太平天国の乱のさなか、咸豊 10 年 5 月 16 日に上海で病死 (X10/5/16.154)。

三男・鄧爾咸：安徽候補知県。

四男・鄧爾晋（字・子楚）：咸豊 10 年 2 月、次男・鄧嘉緒とともに戦死。

五男・鄧爾巽：貴州省貴東道捍勇巴图魯^{*46}。

鄧廷楨の長男・鄧爾恒の非業の死を知ったとき、趙烈文は、

鄧氏の兄弟の 4 人は、位の高い者は布政使 [方牧^{*47}]、低い者は知府・知州 [府州] であったが、1 年のうちにほとんど死に絶えて、現在は 1 人しか残っていない。(中略) その家は、中丞公 (中丞は巡撫、ここでは鄧廷楨を指す、引用者) の清廉潔白な節操 [清節] 以来、天下に名高い。子孫もそれほど道にはずれたことはしていない。ただ生活は非常に奢っていたが、これが天の怒りを招くに足りるというのであろうか (X11/7/15.343)。

と記している。

鄧廷楨の息子たちのうち、太平天国の争乱のなかで戦死したのは四男・鄧爾晋とその次男・鄧嘉緒である。鄧爾晋には息子が7人（嘉紹，嘉緒，嘉緝，嘉綜，嘉綱，嘉紀，嘉緝）いた^{*48}が，三男・鄧嘉緝（字・熙之）は，趙烈文が面倒をみてやった。鄧嘉緝は同治13年3月に易州の官署に招かれて家庭教師をつとめ^{*49}（T13/3/14.1599, T13/8/16.1616），同年10月には鄧夫人とともに常熟に戻って家庭教師を続けることになった（T13/10/2.1622）^{*50}。鄧嘉緝は光緒2年12月に趙烈文のもとを離れた^{*51}が，そののち，「先生は私を認めて可愛がってくださった〔賞識知愛有過〕」，「先生のおこないは前世の陶淵明に似ていた」，「私の顔をじっとみて，書味があふれているとおっしゃった」^{*52}と趙烈文を偲んでいる。鄧嘉緝は，「先生とお別れしてから，お声や笑顔が心にあったので手紙を出して，朝晩拝見したいので肖像画をくださいと頼み」，趙烈文のくれた西洋の写真を見ると，「お顔がやや痩せて，少し目が小さくなったように感じた。病気になるれたところだったのだ」^{*53}と書いている。

後年，趙園に思いをはせたもう一人の人物は陳衡哲（1890-1976）である。陳衡哲は中国の「新文学最初の女性作家，最初の女性大学教授，自己の見解と歴史知識で西洋史の教科書を書いた最初の史学家」^{*54}と評されている。米国留学予備校であった清華学堂の試験に合格して奨学金を得た陳衡哲は，1914年8月，上海からアメリカに向けて船出した。七大著名女子大学の一つであるヴァッサー大学（Vassar College）で歴史学士となり，さらにシカゴ大学で修士号をとった。1920年に帰国して新文化運動の中心であった北京大学に招聘されて教鞭をとった^{*55}。陳衡哲の自伝^{*56}が描いているのは，アメリカに旅立つまでの若き日々である。

陳衡哲は，趙烈文の六姉・趙細瓊^{*57}とその夫・陳鍾英の孫である。陳家の祖先は湖南省衡山地方の農夫であり，いわゆる「耕読世家」であったが，高祖父が四川に行って官途についた^{*58}。陳衡哲の父は陳韜，母は莊曜孚である^{*59}。莊曜孚は常州の莊家^{*60}の出身であり，祖父・陳鍾英は江蘇省で，陳衡哲の「外祖父と知り合った。最初は官場の同僚だったが，のちに学問上の知己となった」^{*61}。祖母・趙細瓊は「常州の趙家の出であったので，息子の嫁たちもみなこの地方からもらった」^{*62}。陳衡哲によれば，

当時の中国人はふつう省内・県内の人と結婚したものである。他省，とくに千里のかなたの省から嫁をもらう人は少なかった。理由は簡単であった。土地によって方言も風俗も異なり，はるかな他郷では親戚を見つけるのも難しかった。最後に，この点は，新郎とその家族にとっては少しも重要ではなかったが，新婦にとって肝心なところであったのだが，父権中心の中国の家庭制度のもとでは，姑は太后のような大権をにぎっていた。もし姑が近親であれば，嫁入り先での暮らしは実家の暮らしと大同小異であり，新婦の暮らしはずっと楽なものになった。この点は，中国女性の人生にとって非常に重要

であったので、父母は早くから、娘のために、そうした、いくらか自在だと感じられる嫁入り先を探してやるのである。しかし、母の実家である莊家は、陳家について、そのような心配は要らなかった。陳家は代々役人であり、各地を渡り歩いていたので、四方のさまざまな珍しい人や事〔奇人異事〕に慣れていた。したがって、陳家の思考様式は省の境界〔省際界線〕にしばられていなかった。おまけに、祖母は常州の知識人の家〔書香門第〕の出であり、莊家も常州であった*63。

「祖母は祖父が退職〔致仕〕したあと、常州に家を建てた。しかしこの仕事の果実をわずか1年享受しただけで、世を去ってしまった。この普請を監督した精神的負担のせいで、50歳過ぎて早逝してしまったと家人は言っていた。(中略)私はこの広々した家で生まれた*64と陳衡哲は言うが、この記憶は正確ではない。第8節で述べたように、常州の十子街の旧宅に邸を建て直したとき、祖母・趙細瓊が「自分で工事を監督し、職人たちを指揮していた」(T6/12/16.1138)のは確かだが、それは同治6年のことであり、趙細瓊が亡くなったのは光緒8年(G8/4/27.2079)、祖父・陳鍾英が在職のまま官舎で息を引き取ったのは光緒6年である(G6/12/30.2005, G7/1/17.2013, G7/1/24.2016)。だが、陳衡哲が常州十子街の家で生まれたのは事実であろう。

趙烈文の長男・趙実は六姉夫妻の長女・陳德音*65と結婚した。陳衡哲にとって、陳德音は父の姉である。1935年、陳衡哲は『東方雜誌』に姑母(おば)・陳德音を偲ぶ短文を寄せている。それによると、

私の祖父母には12人の子女がいた。この姑母が長女であった。私の父は末っ子であったので、この姉弟はまるまる20年も年が離れており、叔母は私より40歳あまり年上であった。この姑母は体が大きく、バイタリティがあり〔精力強勢〕、才気横溢、徳行すぐれていた。一目で、大きな使命をになう〔任重致遠〕指導者の器であるとわかった。数十年前の環境のために、姑母の指導者としての天才は牛刀で鶏を割くように2、3の小さな家族のために使われてしまった。しかし姑母の才能はふつうのいわゆる「才女」のように、風流〔吟風弄月〕に限られてはいなかった。姑母は、詩をつくり、歴史を読み、魏碑を書くほかに、優れた処方をすることもできたし、おいしい料理を作ることもできた。姑母は若い頃、昼間は舅姑に仕え、晩は子供の世話をし、世が更けて寝静まってはじめて書を読み字を書き、夜中の3時になってようやく床につき、翌朝は6時に起きるといことがよくあった*66。

陳德音は、大変しっかりした女性であった*67。陳衡哲は、「もう40年、せめて30年生まれるのが遅ければ*68と、この優れた女性の才能が旧社会で埋もれてしまったことを惜しんでいる。四川省成都府郫県の知県代理の令嬢であった陳衡哲は、親の決めた結婚に背き、経

済的に困難で、良い学校も見つからず、陳德音のもとに逃げ込んだ^{*69}。アメリカ留学のための試験のことを知ったとき、合格する自信がなかった陳衡哲を、ぜひ受験するよう力づけてくれたのが陳德音であった^{*70}。趙烈文夫妻はすでに亡く、陳德音の夫・趙実も故人となっていた。姑母の家には、陳衡哲自身も含めて、

全部で18人が住んでいた。使用人の数は主人と同じくらいであったので、家には全部で40人ほどの老若男女が住んでいたことになる。そして女族長のように、その4分の3の人間を支配していたのが姑母だったのである！^{*71}

この家は三つの部分から成っており、第一の部分は以下の9人で構成されていた^{*72}。

姑母

姑母の亡くなった長男の妻（20歳を過ぎたばかりで後家になった）とその娘1人

姑母の次男夫妻とその息子1人、娘1人

故・趙実の妾とその娘1人^{*73}

「長男」というのは、第7節に登場した「万民」である。祖父・趙烈文が磁州でもらった「万民傘扇」にちなんでこの名を付けた（T10/4/6.1405）。この長男は「結婚して数年で亡くなってしまった」^{*74}。「次男」は、光緒元年に生まれた「千秋」である^{*75}。この次男（陳衡哲にとっては、いとこ）は、

本質は悪くないのだが、不幸にも、無知で下品なうえに結婚前にすでにアヘン中毒だった女性を娶ってしまった。ふつう、姑母のような人は決してアヘン中毒を容認しない。なぜならアヘン吸飲は、中国の教養層から下品で邪悪な行為とみなされていたからである。しかし、いとこは姑母にとって唯一人幸いに残った子供であり、一人息子でもあったので、息子の嫁に警告することができなかったし、嫁の息子に対する影響に干渉することすらなかった。心の中ではアヘン中毒の危害を知っていたのだが。とうとう、いともアヘン中毒になってしまった。家の荘園の収入には限りがあったし、当時高価だったアヘンをこの夫婦が大量に吸ったので、じきに収入が支出に追いつかなくなった。私がある前に姑母を訪ねて^{*76}以降、家財、とくに貴重な書籍や骨董品を質入れする習慣がついてしまっていた。同時に、彼らの住んでいる庭園はほとんど完全に廃れてしまっていた[廢敗]が、誰も修理する者はいなかった。家もぼろぼろだったが、ご老母さま（中国語訳の原語は老太太。陳德音を指す。引用者）は、一日中、多病な息子、孫息子、孫娘の世話に追われて、金も全くないし、いかに居住条件を改善するか考える精力もなかった^{*77}。

姑母の一人息子とその妻・子女はみんなアヘン中毒者になってしまった。そのため姑母

のあの邸宅と大観園のような庭園〔花園〕は、みるみるうちに近くの人に売らなければならない状態になってしまった。姑母は気丈な人で、この状況を前にしてもため息をつくだけで涙を流すことはなかった。しかし、この嘆息は大河ほどの清涙よりも悲しいものであったと私は思う*⁷⁸。

このように、アヘンの害毒も加わって、趙園は荒廃し、質屋の常連になり、手放す日も近いという有様に成り果てていた。

趙園の住人の第二の部分は趙烈文の次男・趙寛の一家であるが、これには、以下の 5 人が含まれていた*⁷⁹。

趙寛夫妻と娘 1 人

趙寛の妻の姉である寡婦

故・趙烈文の妾

陳衡哲によれば、この一家は「いかなる意味においても姑母に依存してはいなかった。彼らはただ同じ家に住んでいるというだけで、食事は別であった。同じ家に住んでいたのは、姑母の亡くなったしゅうと（趙烈文、引用者）の遺産は、その子孫と共有だったからである」*⁸⁰。趙寛のその後については、第 8 節でふれた。趙寛の妻の姉については不詳だが、これも第 8 節で述べたように、趙寛の妻は、趙烈文の妻・鄧嘉祥の親族なので、おそらくこの寡婦も鄧氏であろう。趙烈文の遺した妾というのは、

やっと 30 歳を過ぎたばかりであったが、すでに 15 年ものあいだ後家を通していたのであった。この人は才女であった。教育を受けた、書籍商の娘であったからだ。この人が、自分より 40 歳年長だった、姑母のしゅうとに自ら進んで嫁いだのは、人に陥れられた彼女の父（正しくは兄、引用者）をしゅうとが救ってやったこと、そしてしゅうとが当時有名な文人だったことによる。この人は、姑母のしゅうとを敬慕し感謝〔感激〕して、甘んじて妾になったのである。これは、中国の納妾制度のなかの美談〔韵事〕であり、醜悪な制度に、いくらか高尚でロマンチックな要素を加えたとさえ言えるかもしれない*⁸¹。

上の妾は、前節に登場した俞氏姉妹のいずれかである。年齢からいえば妹のほうかとも思えるが、記されている逸話は姉のものである。

第三の部分は、陳衡哲の伯父にあたる陳鼎の遺族であった*⁸²。第 8 節にも登場したが陳鼎は陳鍾英と趙細瓊の長男であり、陳德音の弟である。陳鼎の生涯は次のように概括されている。

陳鼎，字・剛侯，号・伯商，湖南衡山県人，江蘇常州に僑居。清・咸豊 4（1854）年に

生まれ、光緒 30 (1904) 年に亡くなった。光緒 6 年進士、翰林院編修。光緒 15 年己丑恩科で、浙江郷試副主考官をつとめ、汪康年^{*83}らがその門下から出た。のちに戊戌党の事件で、永遠監禁とされた。光緒 29 (1903) 年の大赦で釈放され、翌年、江蘇常熟県で亡くなった^{*84}。

孔祥吉氏によれば、陳鼎の

一生には特にこれと言った政績はない。(中略) 散館して編修となったあと、まるまる 30 年間ずっと京師で翰林院の職にあった。(中略) ただ、光緒 15 年の皇帝大婚のときに恩科がひらかれ、陳氏は浙江郷試副考官に選ばれて派遣され、汪康年をふくむ有名な学士を合格させた。これが平々凡々とした京官生活に、少しばかり生気を添えている^{*85}。

陳鼎は汪康年にあてた手紙に、「暇をとって帰郷したいと思いながら、決心がつかない。ここ数年多病で、何をするのも物憂い〔懶動怕事〕。近頃また吐血し、鬢の毛がますます白くなった。50 歳にもならないのに、すでに 60 歳、70 歳のような^{*86}としたためている。この手紙の日付は不明だが、1854 年生まれの陳鼎が 40 代かと思われる。仮に数えて 45 歳とすると、1898 (光緒 24) 年であり、光緒帝の変法がおこなわれた戊戌の年である。同じ手紙のなかで、

科挙を改め、学堂を立て、特科^{*87}を設け、経国済民〔經濟〕を求めても、人材〔人才〕を得ることはできない。宋人の書を焼き尽くし、天下の士人が真の姿で互いに向き合うようになってはじめて、優れた才知と計画〔雄才大略〕が、狭量な小儒に遮られることがなくなるのだ^{*88}

と述べているように、陳鼎は当時の学問や科挙に対して根本的な疑問を抱いていた。「康有為や梁啓超が改革しようとしたのは八股文という形式だけであり、試験の内容には及ばなかった。一方陳鼎は(中略) 当時行なわれていた科挙試験の内容を徹底的に否定している^{*89}と孔祥吉氏は述べる。

光緒 24 年には、『清実録』に陳鼎の名が登場するが、それには次のような背景があった。孫家鼐^{*90}が馮桂芬^{*91}の『校邠廬抗議』を印刷公布することを願い出た結果、この書が 1000 部印刷されることになった^{*92}。それらは様々な役所に配布され、一条ごとに実行の可否を論じて 10 日のうちに軍機処に送るようとの命令が出された^{*93}。だが、「当時、京官のなかでは、守旧派と日和見主義者が絶対多数を占めていたので、『校邠廬抗議』に付箋をつけて意見を述べる〔籤注〕というのは、光緒帝が期待したような成果をあげなかった^{*94}

と孔祥吉氏は述べている。

そんななかで、翰林院から編修・陳鼎の「校邨廬抗議別論」（以下、「別論」と略記）48篇が献上され、光緒帝は、この論説に「採るべきところがあるかどうか、軍機大臣と総理衙門王大臣が共同して、専心閲読し、十分に議論し〔妥議〕、上奏せよ」と命じた^{*95}。「清廷の慣例では、群臣百官の上奏文〔奏摺〕の内容が非常に重要であるときのみ、皇帝は軍機大臣と総理衙門大臣に共同で検討〔研究〕・討論するよう命じ、取捨を決定した」^{*96}と孔祥吉氏は指摘する。もっともこの場合、ほかに反応がなかったために、光緒帝は陳鼎の「別論」を重視するしかなかったのではないかとも考えられる。光緒帝はさらに、「別論」を陳鼎に「もう一部献上させ、翰林院から軍機処に送り、御覽〔呈覽〕に備えよ」^{*97}と命じている。孔祥吉氏によると、中国第一歴史檔案館に所蔵されている「別論」は4巻、4冊に分けられており、欧米列強に負けないために、4つの面から臨機応変〔変通〕の策を提示している。第一は服装を変えること、第二は宗教を融和させること、第三は言語文字に通じること、第四は婚姻を通じることであり、中国と西洋の通婚を建議した中国官員は、おそらく陳鼎が最初であった^{*98}。

「別論」は「翰林院掌院学士を通じて光緒帝に捧呈された」が、「当時、翰林院掌院学士は知らぬ者のない〔遠近聞名〕頑固派の首領・徐桐であった。（中略）『たとえ国が滅ぶとも、変法は不可である』と主張していた人物である。彼は陳鼎に対して一貫して敵意に満ちていた」^{*99}。陳衡哲は、陳鼎は「ある腐敗した大官の機嫌を損ねて」^{*100}湖南省に流罪となったと記しているが、この「大官」は徐桐を指していると考えられる。徐桐（1819-1900）、字は豫如、号は蔭軒・仲琴、漢軍正藍旗、道光30年庚戌科で2甲67名進士、散館して編修となり、同治帝の師をつとめたこともある。康有為や梁啓超の変法に極力反対し、慈禧太后の寵愛と信任を得ていたが、義和団事件で八カ国連合軍が北京に攻め入ったときに縊死した^{*101}。この徐桐が、光緒8（1882）年から光緒26（1900）年に死亡するまでずっと翰林院掌院学士をつとめていたのである^{*102}。

結局、「別論」が議論されないうちに戊戌政変が勃発した^{*103}。変法は挫折し、譚嗣同ら「戊戌六君子」は刑場の露と消え^{*104}、康有為や梁啓超は国外に逃れた。孔祥吉氏によれば、

戊戌政変の失敗から庚子の義和団事件の勃発までは、清末の歴史のなかで最も暗黒と恐怖に支配された時期であり、守旧勢力が猖獗を極めた。（中略）翰林院掌院学士・徐桐は、慈禧の放任と寵愛を受けて、各国との往来を断絶して中国にいる外国人を皆殺しにすることを公然と提議した。当然、彼は自分の管轄下にある翰林院で、外国に学ぶこと、西洋と宗教を融和させ通婚することを鼓吹する陳鼎を放ってはおかなかった^{*105}。

もっとも陳鼎は、「改革に賛同し、守旧を激しく非難していたが、康有為や梁啓超ら改革派の人々と交際することは少なかった」^{*106}。康有為や梁啓超と直接的な関係がなかったため

に、陳鼎は命を失うまでには至らなかった。翰林院の編修・陳鼎と検討・呉式釗^{*107}は「翰林院掌院学士の崑岡^{*108}と徐桐の上奏弾劾にもとづいて」逮捕され、「革職とし、刑部から兵部に引き渡し、それぞれの原籍に送るよう沿途に通達せよ。それぞれの総督・巡撫は地方官に命じて永遠監禁として騒ぎが起きないようにせよ」^{*109}という命令が出された。翰林院は、「編修・陳鼎は偏屈で心がけが良くない〔性情乖謬、心術不端〕。『校邠廬抗議』につけた注は、異説が多い」^{*110}と上奏している。翰林院編修・陳鼎、検討・呉式釗、編修・沈鵬^{*111}について、それぞれの原籍の大官たち^{*112}は、「それぞれの按察司に命じて、これらの者たちが到着したら、司監に収容させ、管獄各官^{*113}に、きびしく監禁させよ。常に〔不時〕、真剣に見回りをして、地方の人間などと交際しないようにせよ」^{*114}と命じられた。陳鼎は湖南省按察使司の監獄に入れられた。

陳鼎は、家庭生活においても不運であった。陳衡哲によれば、「大伯（一番上のおじ、すなわち陳鼎）」は

小さいころから、中国の決まりにしたがって、父母によって婚約させられていた。不幸なことに、大伯の許婚者は、天性も教育も、教養ある男性には全然釣り合わなかった^{*115}。

結局、この結婚は解消された。「大伯は数年間の不幸な結婚のあと、田舎で何不自由なく暮らしていけるだけの金銭を与えて、この子のない妻と容易に別れることができた」^{*116}のである。趙烈文も『日記』のなかで、この甥の離婚にふれて、「鼎甥は嫁を捨てようとしているので、嫁が訴えにきた。だが、一朝一夕のことではないので繕いを戻すことはできない。甥たちに慰め安心させて、ひどいことをしないよう諭す」（G8/7/11.2090）と書いている。だが、この離婚は悪評を呼んだ。光緒6年に進士になった陳鼎が、いくらもたたないうちに離婚するというのは、「糟糠の妻」を捨てる非情な所業だと噂されたことだろう。陳衡哲によれば、

大伯にとってさらに不利だったのは、陳家が常州ではよそ者〔外来戸〕だったことである。地元の間人は、文壇と官場で輝かしい名声をもつ、前途洋々たるこの家族に対して、とうに嫉妬心を抱いていた。このために大伯の行為は、地元の郷紳士人、一般庶民のいずれにも、彼を批判する絶好の機会を与えてしまい、大伯はまもなく衆矢的になってしまった。同時に、大伯はある婚礼（中国で唯一、男性客が若い女性を見ることのできる集まり）で見かけた若く才能ある大家の閨秀^{*117}に一目惚れしてしまった。その後すぐに、この女性の父母に正式に縁談を申し込んだが、両親は大伯に対して深い先入観があり、この求婚を断固として拒絶した。失望と傷心のあまり、大伯は生涯再婚せず、妾を2人娶っただけであった^{*118}。

陳鼎にとって、この 2 人の妾がまた後顧の憂いとなった。

大伯が湖南省に流されたとき、年上のほうの妾の子供はみな夭折してしまったが、年下の、人柄の良い妾には息子と娘が一人ずついた。このような状況だったので、年長の妾は面白くなく、この恋敵に対して悪意ある嫉妬に満ちており、なに憚ることなくその悪意をあらわにしていた。大伯は、幼い後継ぎの息子の生命の安全を心配しはじめた。中国社会では、一家の長女は結婚後も実家で一定の権威をもっている。父母と兄が世を去った後はなおさらであり、その言葉には千金の重みがあった [一言九鼎]。姑母の権威は次の理由によっていっそう明らかであった。第一に姑母の力強い個性、第二に姑母は度量が広く、弟たちの幸福を大いに気にかけていたからである。第三に姑母の住んでいる家と庭園は名実ともに [名正言順] 彼女のものであったし、彼女の弟たちにとって幼年時代の第二の家であったからである。姑母のしゅうと (趙烈文, 引用者) は、私の祖母 (趙細瓊, 引用者) の弟であったので、姑母の弟たちはしょっちゅうこのおじ [舅舅] の家で休暇を過ごしていたのである。したがって、大伯が赦されて自由の身になったあと真っ先に思い至ったのが、このずっと保護者と恃んできた姉だったのは自然なことであり、馴染みの場所に住むことに決めたのである^{*119}。

このように、釈放後の陳鼎は「特殊な家庭状況によって、自分亡き後、子女の世話をしてくれる人の近くに住む必要があった」^{*120} のである。「都を追われたあと、陳鼎の境遇は次第に悪化し、心身ともに次第に損なわれ、3 年後に赦により釈放されたが、まもなくこの世を去った」^{*121}。

陳衡哲が姑母の家すなわち趙園を訪れたとき、

大伯はすでにこの世の人ではなく、寡婦となった 2 人の妾と 2 人の孤児が姑母のもとに遺されていた。かれらの生活のために常州付近に幾らかの不動産 [田産] も遺されていた^{*122}。

陳德音は、陳鼎の遺族について、手紙に次のように記している。

伯弟 (一番上の弟すなわち陳鼎, 引用者) は息子と娘を 1 人ずつ遺しました。母は同じです。息子はやっと 7 歳になったばかり、父親が亡くなったときはたった 3 歳でした。娘は 17 歳です。息子の名は獄生、娘の名は慎儀です。賢い子供たちです。息子は現在教師をつけて [専館] 学問させています。娘のほうは、当地の競化高等班に入りました。(中略) 一家は 10 人ほどですが、水と火のように相容れません。わたくしはその間をとりもつ [周旋] のに大いに苦心していますが、効果は期待できず、いつも悶々とし

ています。(中略) 末の弟は遠く四川で官途についていますが、清貧で、こちらの面倒まで見ることはできません。2番目の弟のことはよくご存じですから、書きません*¹²³。
(下線, 引用者)

上の文中の「末の弟」は陳衡哲の父・陳韜, 「2番目の弟」というのは陳範である。陳範(1860-1913), 字は叔柔, 光緒年間の拳人であり, 江西省で知県をつとめた。陳範は光緒26(1900)年に上海で『蘇報』を手に入れ, 光緒29(1903)年に鄒容の『革命軍』や章炳麟の『駁康有為論革命書』などを紹介して「蘇報事件[蘇報案]」を起こしたあと, 日本に逃亡した*¹²⁴。陳家は, 陳鼎や陳範など, 社会変革を志す人材を輩出したといえることができるが, 彼らの姉である陳德音の苦悩は深かった。

このように, 趙烈文の姻戚である鄧邦述と陳衡哲は, 青年時代の一時期を趙園で過ごしている。苦しかった時代を趙園に支えられた二人は, 後年, 近代中国における文化の発展に貢献することになった。一方, 趙園は, 陳德音の必死の努力にもかかわらず没落の一途をたどり, 第8節で述べたように, その主を替えることになった。

〈注〉

- *1 第8節注12参照。
- *2 「趙園」の殿春廊に掲げられた説明(「水吾清話」のなかの「天放楼蔵書」)によれば, 「天放楼」の蔵書は後に南京図書館に収められた。
- *3 弋炳根主編『常熟国家歴史文化名城詞典』上海辞書出版社, 2003年, 169-170頁。
- *4 李鴻裔, 字は眉生, 号は香巖・蘇鄰, 四川省潼川府中江県の人。同治6-7(1867-1868)年に江蘇省按察使をつとめ, 光緒11(1885)年に55歳で死去した(錢実甫編『清代職官年表』中華書局, 1997年, 2171-2172, 3171頁)。
- *5 顧文彬著, 蘇州市檔案局(館)・蘇州市過雲楼文化研究会編『過雲楼日記(点校本)』文匯出版社, 2015年, 光緒9年3月・4月, 538-539頁。金石文とは, 鐘鼎(金)・碑碣(石)等に鐫刻された古い文字である。
- *6 前掲『過雲楼日記(点校本)』光緒2年5月1日, 392頁。玉蘭散人・拙石『園疑 与蘇州園林有関の金銭, 政治, 欲望』(中国建築工業出版社, 2013年)は, 「留園(もとは劉園)」の価格が5650両というのは異常な安さであると指摘している。面白い文章ではあるが, 筆名を使っている点などを考慮して, 注で紹介するに留めたい。「玉蘭散人」が執筆した上輯「蘇州庭園と関係する金銭政治(与蘇州園林有関の金銭政治)」の第1章「蘇州庭園はいくらで売れた? — 留園の譲渡から清末蘇州の上層社会関係をみる(蘇州園林能売幾個錢? — 從留園の転讓看晚清蘇州の上層社会関係)」では, おおまかに銀「1両は200元」という比率で計算すると, 「5650両は, 現在の人民币113万円にしかならない。現今, 蘇州の普通の住宅価格はおよそ1平米が1万円である。留園附近には別荘区があり, 留園のおかげを蒙って『留園世家』と呼ばれている。『留園世家』の戸建ての別荘の土地は約250m², 現在の価格はいずれも1500万元以上である。今日目で見れば, 人民币113万円で留園が買えるというのは, 安いというより, 荒唐ですらある。(中略) 木瀆の(中略)巖家花園は江南名園と言えなくもないが, 土地はわずか16畝(1畝は約6.6アール=660m², すなわち16畝は約1万560m², 第8節で述べたように留園は約30畝である, 引用者), 中国四大名園の留園と比べると, 規模・水準・知名度のすべてにおいて何

等級も劣っている。しかし、嚴家花園は銀20万両で取引された。現在の4000万円に相当する。留園はわずかに銀5650両であり、40倍の違いがある。二つの園の取引には25年の開きがあり、この25年間に銀価が暴落して、この巨大な価格差が生じたのだろうか。学者の研究によると、清朝最後の20年に銀建て食糧価格〔銀計糧値〕は2倍となった。つまり、清末にはたしかに銀価が下落した。しかしたとえこの点を考慮にいれても、留園は嚴家花園の20分の1で取引されたのである（前掲『園疑』7-9頁）、つまり「劉園」の価格は不当に安かった、それは「留園のほととの主人である程臥雲」は「金はあったが官界とのつながり〔官方背景〕がなかったので、当時の蘇州の官宦の家に振り回されていた」（前掲『園疑』27-29頁）からだと言われている。だが一方で、第2章「拙政園の政治経済学（上）——拙政園から王猷臣をみる（拙政園里的政治経済学（上）——從拙政園看王猷臣）」では、明代の王猷臣が拙政園の土地を購入したことについて、「蘇州地区では正徳3年に比較的大きな地震災害が起きた（中略）地価は必ずや安かったことだろう」（前掲『園疑』45頁）と「玉蘭散人」は書いている。劉園の取引も太平天国の後だったことを考えれば、安値でも不思議はないのではないだろうか。趙烈文が常熟に土地を買ったのは同治4年で、まさに太平天国滅亡直後の時期であった。

- *7 目の肥えた顧文彬がもっとも評価していたのは拙政園であった。「拙政園に遊ぶ。古木がそびえ、蓮の葉が岸と同じ高さにしげり、山林の気がある。怡園に勝るのみならず、留園も及ぶところではない。惜しむらくは、その優れた趣〔勝趣〕を理解できるものは少ない」（前掲『過雲樓日記（点校本）』光緒4年8月4日、473頁）。
- *8 後述の陳衡哲は常熟を「幹道から遠く離れた場所」と表現している（陳衡哲著、馮進訳『陳衡哲早年自伝』安徽教育出版社、2006年、167頁）。
- *9 もっとも顧文彬は在官時代の蓄財のみならず、たとえば光緒4年の『過雲樓日記』に「潘和豐醬園（醬園とは醤油、みそ、みそ漬けなどの製造販売店、引用者）を手に入れた。東西の二つの店があり、房屋、店貨、設備や器具、あわせて7000両あまりである」（前掲『過雲樓日記（点校本）』光緒4年6月4日、469頁）と書かれているように、引退後も殖財につとめている。
- *10 趙烈文『能靜居日記』岳麓書社、2013年。以下、たとえば「咸豊10年正月27日（106頁）」はX10/1/27.106、「同治3年7月5日（809頁）」はT3/7/5.809、「光緒元年2月20日（1646頁）」はG1/2/20.1646と表記する。Xは咸豊（Xianfeng）、Tは同治（Tongzhi）、Gは光緒（Guangxu）の発音記号の頭文字である。
- *11 白幡洋三郎『大名庭園』講談社、1997年、188頁。
- *12 喬曉軍編『清代翰林伝略』陝西旅游出版社、2002年、446頁。
- *13 鄧嘉績（1845-1915）は優貢生、光緒元（1875）年に挙人となった（南京師範大学古文献整理研究所『江蘇芸文志・南京卷』江蘇人民出版社、1995年、978頁）。『日記』にも鄧嘉績の郷試合格が記されている（G1/11/6.1726）。鄧嘉績は会試に失敗したあと、「優貢をもって考用知県となり、部（吏部、引用者）で籤を引いたところ、貴州省を引き当てた。家は貧しく道のりは遠く、旧友〔朋旧〕たちはみな残念がっている」（G9/7/7.2135）。鄧嘉績は趙烈文に光緒9年10月23日に貴州に向けて発つと話している（G9/10/15.2146）。同治2（1863）年の新法によって、翌年の甲子科から、保和殿で優貢生の試験をおこない、一等二等のものは知県・教職に採用〔録用〕、三等のものは訓導に選用されることになった（朱金甫・張書才主編、李国栄副主編『清代典章制度辞典』中国人民大学出版社、2011年、245頁）。優貢生だった鄧嘉績はこれによって知県となったと考えられるが、貴州省のような僻遠の地に赴任することになったときの失望がよくわかる。
- *14 前掲『江蘇芸文志・南京卷』1018頁。
- *15 女性の名前は特定するのが難しいが、「嘉祥」という名は、手紙の差し出し人の名として書かれている（『趙惠甫家書』南京図書館蔵、写真番号はフォルダ1の00000043）。鄧嘉祥の幼名は「吉止」である（『落花春雨巢日記』南京図書館蔵、咸豊2年6月9日（写真番号0038）に「余

- 婦鄧氏吉止」という記述がある)。「南陽」というのは、鄧姓の郡望すなわち発源地である。後述の鄧嘉輯も、趙烈文にならったのか、後妻の陳氏を「潁川君」と呼んでいる(「継室潁川君行略」『扁齋文存』巻下、33頁)。「潁川」は陳姓の郡望である。
- *16 鄧邦述撰、金曉東整理『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』上海古籍出版社、2014年、正閣居士「旧叙」9頁。
- *17 第6節注6参照。
- *18 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』宗舜年「序」5頁
- *19 鄧旭(1609-1683)、安徽省鳳陽州寿州の人。順治4年丁亥科三甲20名進士。散館して検討を授かる。順治8年に江西主考官をつとめ、甘肅洮岷道となる。引退後は、長く江寧に住んだ。旅行を好み、五岳のうち四つを訪れている。詩には名勝古跡を題詠したものが多い。著書に『林屋詩集』がある(前掲『清代翰林伝略』6頁)。
- *20 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』整理説明、1頁。
- *21 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』正閣居士「旧叙」9頁。
- *22 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』整理説明、1頁。
- *23 李盛平主編『中国近現代人名大辞典』中国国際広播出版社、1989年、31頁。
- *24 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』正閣居士「旧叙」9頁。
- *25 載澤、1868-1930(?)年、清朝宗室・大臣、正白旗満洲、光緒31(1905)年に日本や欧米諸国を視察し、帰国後に立憲君主制の実施を主張した(孫文良・董守義主編『清史稿辞典』山東教育出版社、2008年、2145頁)。
- *26 端方については、以下を参照。前掲『清史稿辞典』2378頁。前掲『中国近現代人名大辞典』723頁。京大東洋史辞典編纂会『新編 東洋史辞典』東京創元社、平成7(1995)年、545頁。
- *27 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』整理説明、1-2頁。
- *28 前掲『江蘇芸文志・南京卷』1018頁。
- *29 李中、字は有中、五代・南唐、隴西の人、著書に『碧雲集』がある。
- *30 李羣玉、字は文山、唐、澧州の人、著書に『李羣玉集』がある。
- *31 黄丕烈、字は紹武(紹甫)など、江蘇省蘇州府呉県の人、乾隆年間の挙人。蔵書を好み、士礼居叢書を刊行した。
- *32 奉天、吉林、黒龍江は東三省に改められ(趙爾巽等撰『清史稿』中華書局、2003年、巻五十四、志二十九、地理一、1891頁)、「司」が新設されたが、そのうち「交渉使司」には交渉使(正三品)が一人置かれて国交を掌り、「民政使司」には民政使(従二品)が一人置かれ、一般人民の戸籍を掌った(同書、巻一百十九、志九十四、職官六・新官制、3473頁)。
- *33 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』整理説明、2頁。
- *34 涵芬楼は上海の商務印書館の蔵書閣である。李咸用、号は披沙、唐の人、詩に巧みで、著書に『披沙集』がある。
- *35 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』整理説明、2頁。
- *36 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』正閣居士「序」3頁
- *37 前掲『中国近現代人名大辞典』31頁。
- *38 前掲『羣碧樓善本書録 寒瘦山房鬻存善本書目』正閣居士「序」3頁。
- *39 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典(全編増訂本)』浙江古籍出版社、2005年、123頁。
- *40 陳乃乾『陽湖趙惠甫(烈文)先生年譜』(沈雲龍主編、近代中国史料叢刊統編第九十九輯、文海出版社、中華民國72(1983)年)7頁。
- *41 南京図書館蔵、写真番号0019。
- *42 『統纂江甯府志』(一)(据・清蔣啓勛等修汪士鐸等纂、清光緒六年刊本影印、中国方志叢書・華中地方・第一号、成文出版社有限公司印行)巻十四之二、人物、「鄧廷楨」7(202)頁。
- *43 許浩『江蘇園林図像史』南京大学出版社、2016年、南京巻、16頁。

- *44 前掲『統纂江甯府志』(一) 卷十四之二, 人物, 「鄧廷楨」9-10 (203) 頁, 『統纂江甯府志』(二) 卷十四之十二, 人物, 「鄧爾晋」13-14 (313) 頁を参照。
- *45 『日記』には次のように記されている。「子久先生(鄧爾恒, 引用者)が雲南巡撫・徐之銘(貴州畢節人)によって殺されたということを, はじめて確実に知った。徐は科甲出身, 知府[郡守]・道員・按察使・布政使など[監司]を歴任して巡撫になった。人となりは暴戾狂悪, 行いは禽獸にひとしく, 家庭内のことは言うに忍びない。雲南では, 総兵・何有宝と徒党を組んでいた。何は勇頭出身で鎮將(清代の緑營兵の編制は鎮, 協, 營, 汛の4級であり, 鎮の長官が総兵であった。前掲『清代典章制度辞典』782頁)になって, 衆をたのんでほしいままにふるまい, 不法なことをし, 人を殺して略奪し, ほしいままに役人を殺害していた。徐は称号のある夫人を汚して死に追いやったこともある。このような事件は枚挙に暇がない。鄧(爾恒, 引用者)は雲南布政使代理をつとめていたが, すぐに徐に嫌われた。詔によって貴州巡撫に昇任したが, まもなく陝西巡撫に異動となり, 都に行って陸見することになった。徐は悪行が暴露されるのをおそれて, 何(有保, 引用者)の部下に金をつかませて, 途中で殺害させることにした。曲靖まで行った。知府の呉某(字・子拳, 陽湖人)は鄧の門生であり, かねてその徳を受けていたので, 役所に引き留めてしばらく休んでもらうことにした。何有宝はちょうどその地におり, 奸策は日々切迫した。さまざまな話が耳に入ってきたが, 鄧は信じなかった。3月22日, 鄧が客の相手をして役所に帰ってくると, 叛徒がついに殺害に及んだのである。荷物はすべて奪われた。遺された妾, 幼い子女の合計5人もほとんど逃れることができなかった。徐は口実を設けてごまかして上奏し[曠奏], 香典[奠儀]を贈ってその所行を隠そうとしたが, 事は明らかであり, 周知のことである」(X11/11/6.427)。
- *46 「巴図魯」は満洲語の音訳で, 意味は「勇士」「英雄」。清代には, たびたび軍功をあげた者はよく「巴図魯」の称号を与えられた。のちに巴図魯の称号を賜る者が増えたため, しばしば「侃勇巴図魯」「達春巴図魯」などのように巴図魯の前に他の字がつけられた(前掲『清代典章制度辞典』138頁)。
- *47 「方伯」は布政使の別称, 「牧」は知州の簡称(前掲『清代典章制度辞典』125, 391頁)なので, 「方伯」の誤りではないだろうか。上述のように, 鄧爾恒は雲南布政使をつとめていた。
- *48 附録・顧雲「皇清追贈太僕寺卿浙江候補知府鄧府君墓碑銘並序」『扁善齊文存』巻下23頁。
- *49 「附從兄嘉績李宜人家伝」『扁善齊文存』巻下15頁。
- *50 「先生の眷属と南に戻り, 先生の家の責任を負う[主] こと数年」(「祭趙惠甫先生文」『扁善齊文存』巻下38頁)と鄧嘉緝も記している。
- *51 「熙之は, 家庭教師をやめ[解館], 明日武林(杭州, 引用者)に行き, 来年は家で母のそばにいたので, もう来ない。私は引退して, 内顧の憂いをなくしてやることができないので, 無理強いはできない。非常に残念である」(G2/12/23.1785)と趙烈文は別れを惜んでいる。
- *52 前掲「祭趙惠甫先生文」37-38頁。
- *53 前掲「祭趙惠甫先生文」38頁。
- *54 朱維之編『陳衡哲散文選集』百花文芸出版社, 2009年, 朱維之「序言」19頁。
- *55 前掲『陳衡哲早年自伝』「訳者前言」3, 8頁, (本文)167-174頁。陳衡哲は1922年に北大を辞職し, 生まれてまもない長女を連れて, 当時商務印書館で編集をしていた夫・任鴻雋とともに上海に行った。その後, 任鴻雋が東南大学副校長, 四川大学校長をしていたときに西洋史を教え, 1930年に北大で1年教えた(同書「訳者前言」8頁)。
- *56 Chen Nan-hua (Chen Hengzhe), *Autobiography of a Chinese Young Girl*, Peiping, 1935. 英語版を入手できなかったため, 本稿では前掲の馮進訳『陳衡哲早年自伝』(安徽教育出版社, 2006年)を用いている。
- *57 六姉の本名である(王雲五主編, 朱尚文編『清趙惠甫先生烈文年譜』台湾商務印書館, 中華民國69(1980)年, 1頁)。

- *58 前掲『陳衡哲早年自伝』4頁。
- *59 前掲『陳衡哲散文選集』朱維之「序言」1-2頁。
- *60 Benjamin A. Elman, *Classicism, Politics, and Kinship The Ch'ang-chou School of New Text Confucianism in Late Imperial China*, University of California Press, 1990 を参照。
- *61 前掲『陳衡哲早年自伝』5頁。
- *62 前掲『陳衡哲早年自伝』6頁。
- *63 前掲『陳衡哲早年自伝』16-17頁。
- *64 前掲『陳衡哲早年自伝』6頁。
- *65 陳德音の名は、手紙の差し出し人の名として書かれている（上海図書館編『汪康年師友書札』上海書店出版社、2017年、1889-1891頁）ので特定できる。
- *66 陳衡哲「紀念一位老姑母」『東方雜誌』第32卷第1号、生活之一頁、76頁。
- *67 『日記』にも、夫の趙実が帰郷の途中で妻に手紙を寄越し、「乗船しようとしたところ具合が悪くなったので上海まで迎えにきてくれという。嫁はすぐ舟を雇って出かけた」（G10/閏5/5.2179）という記述がある。
- *68 前掲『陳衡哲早年自伝』135頁。
- *69 前掲『陳衡哲早年自伝』128頁。前掲「紀念一位老姑母」76頁。
- *70 前掲『陳衡哲早年自伝』167-168頁。
- *71 前掲『陳衡哲早年自伝』151-152頁。
- *72 前掲『陳衡哲早年自伝』144、152頁。
- *73 趙実の妻とその娘については、「私がこの章を書いたとき、姑母の一家で存命なのは、重要でない人たち、つまり姑母の夫の妻とその娘の2人だけである。その他の7人の墓地の木もすっかり背が高くなっている」（前掲『陳衡哲早年自伝』153頁）と書かれている。
- *74 前掲『陳衡哲早年自伝』42頁。
- *75 『常州觀莊趙氏支譜』卷七、太原公分世表第八、20頁。千秋のわきに大雅と書き加えられているので、改名したのかもしれない。
- *76 「私は2、3年前にはじめて姑母の家を訪ねていた。この数年のうちに彼女の家にはなんと大きな変化があったことだろう！」（前掲『陳衡哲早年自伝』135頁）と陳衡哲は書いている。
- *77 前掲『陳衡哲早年自伝』135-136頁。
- *78 前掲「紀念一位老姑母」76頁。
- *79 前掲『陳衡哲早年自伝』144-145頁。
- *80 前掲『陳衡哲早年自伝』145頁。
- *81 前掲『陳衡哲早年自伝』152-153頁。
- *82 前掲『陳衡哲早年自伝』145頁。
- *83 汪康年（1860-1911）、浙江省杭州府錢塘県人、字は穰卿、光緒20（1894）年甲午恩科の進士。1895年に上海強学会に参加、『時務法』、『昌言報』、『時務日報』（のちの『中外日報』）、『京報』、『芻言報』などを出した（前掲『中国近現代人名大辞典』329頁。朱保炯・謝沛霖『明清進士題名碑録索引』上海古籍出版社、2004年、2856頁。）
- *84 前掲『汪康年師友書札』「陳鼎」3776頁。
- *85 孔祥吉「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和其他的『校邠廬抗議別論』談起」『歴史研究』1996年第6号。『復印報刊資料』K3中国近代史、1997年第3号に再録。後者の104頁。以下、頁数はすべて後者のものである。
- *86 前掲『汪康年師友書札』「穰卿仁弟足下」1887頁。
- *87 經濟特科を指すと考えられる。經濟特科とは、清末に統治の人材を招致するために特別に設けられた試験科目であり、光緒23（1897）年に貴州学政・嚴修が奏請し、総理各国事務衙門と礼部によって章程六条もつくられたが、戊戌政変によって実行されず、光緒27年になって、内外

- 大臣に推挙するよう詔が出され、光緒29年に保和殿で試験が行われた（前掲『清代典章制度辞典』440頁）。
- *88 前掲『汪康年師友書札』「穰卿仁弟足下」1887頁。
- *89 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」105-106頁。
- *90 孫家鼐（1827-1909），字は燮臣，安徽省鳳陽府壽州人，咸豐9年己未科の狀元。翁同龢とともに光緒帝の帝師をつとめ，強学会に名を連ねた（前掲『清代翰林伝略』353頁）。
- *91 馮桂芬（1809-1874），字は林一，江蘇省蘇州府吳縣人，道光20年庚子科の榜眼。生涯，經世致用の学を重視し，西学研究に意を注いだ。西学を採用し，西洋の器具〔器〕を製造し，軍事工業と工鉱交通運輸事業を發展させることを主張した。著書の『校邠廬抗議』は戊戌維新派思想の先駆け〔先河〕となり，改良派によって指導者〔導師〕に奉じられた（前掲『清代翰林伝略』313頁）。
- *92 『德宗景皇帝実録（六）』（『清実録』五七）卷四二〇，光緒二十四年五月辛巳條，中華書局，1987年，511頁。
- *93 前掲『德宗景皇帝実録（六）』（『清実録』五七）卷四二一，光緒二十四年六月戊子條，516頁。
- *94 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」106頁。
- *95 前掲『德宗景皇帝実録（六）』（『清実録』五七）卷四二三，光緒二十四年七月，549頁。
- *96 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」107頁。
- *97 前掲『德宗景皇帝実録（六）』（『清実録』五七）卷四二三，光緒二十四年七月，550頁。孔祥吉氏は中国第一歴史檔案館蔵の『随手登記檔』光緒二十四年秋季檔にもとづいて，光緒帝は陳鼎に「別論」を10部書きさせて翰林院から代呈させたと述べている（前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」107頁）。
- *98 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」103，107，109-110頁。
- *99 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」107頁。
- *100 前掲『陳衡哲早年自伝』146頁。
- *101 前掲『清代翰林伝略』337頁。
- *102 前掲『清代職官年表』1093-1110頁。
- *103 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」112頁。
- *104 前掲『德宗景皇帝実録（六）』（『清実録』五七）卷四二七，光緒二十四年八月乙未條，606-607頁。
- *105 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」112頁。
- *106 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」105頁。
- *107 吳式釗，字は弼其，号は楚生，雲南省永昌府保山人，光緒20年甲午恩科3甲6名進士，散館して檢討を授かる，官は候補道に至る（前掲『清代翰林伝略』439頁）。
- *108 崑岡は宗室で，光緒24（1898）年から光緒29（1903）年まで翰林院掌院学士をつとめた（前掲『清代職官年表』1108-1113頁）。翰林院掌院学士（從二品）は，満・漢各一名であった（前掲『清史稿』卷一百十五，志九十，職官二，3309頁）。
- *109 『德宗景皇帝実録（七）』（『清実録』五八）卷四五八，光緒二十六年正月庚午條，中華書局，1987年，17頁。
- *110 前掲『德宗景皇帝実録（七）』（『清実録』五八）卷四五九，光緒二十六年二月辛巳條，22頁。
- *111 沈鵬（1870-1909），字は北山，号は誦棠，江蘇省蘇州府常熟人，光緒20年甲午恩科2甲130名進士，散館して編修を授かる，御史となり，榮祿らを弾劾したことにより罪を得て，数年監禁〔禁囚〕された。翁同龢の門下である（前掲『清代翰林伝略』439頁）。
- *112 鹿伝霖，陸元鼎，丁振鐸，兪廉三である。光緒26年2月の時点で，鹿伝霖は江蘇巡撫，陸元鼎は江蘇按察使，丁振鐸は雲南巡撫，兪廉三は湖南巡撫であった（前掲『清代職官年表』1739，2201頁）。

- *113 按察使司には司獄（従九品）が置かれ、監獄事務を管理していた（前掲『清代典章制度辞典』198-199頁）。
- *114 前掲『徳宗景皇帝実録（七）』（『清実録』五八）卷四五九，光緒二十六年二月辛巳條，23頁。
- *115 前掲『陳衡哲早年自伝』146頁。
- *116 前掲『陳衡哲早年自伝』147-148頁。
- *117 この女性には後日談がある。「大伯が結婚しようとしてできなかった，あの女性はその後どうなったか。大伯は当時まだ30歳前で，すでに文壇で飛び抜けた声望があり，翰林でもあり，中国の才女の心を動かす条件をすべて備えていた。（中略）彼女は生涯嫁がぬという誓いをたてた。（中略）最後には出家して尼になった。（中略）多年ののち，大伯の訃報をきいたとき，最も重い喪〔重孝〕に服した。それから数年して自分も世を去ったが，陳家に嫁入りした者として埋葬してほしいと言ひ遣した」（前掲『陳衡哲早年自伝』148-149頁）。
- *118 前掲『陳衡哲早年自伝』148頁。
- *119 前掲『陳衡哲早年自伝』150-151頁。
- *120 前掲『陳衡哲早年自伝』146頁。
- *121 前掲「晚清知識分子的悲劇——從陳鼎和的『校邠廬抗議別論』談起」113頁。
- *122 前掲『陳衡哲早年自伝』151頁。
- *123 前掲『汪康年師友書札』『世嫂大人左右』1890-1891頁。
- *124 前掲『中国近現代人名大辞典』388頁。鄒容（1885-1905，字・蔚丹，四川省重慶府巴县人）は1903年5月に『革命軍』を書いて革命を宣伝し，清政府を打倒して中華共和国をつくることを呼びかけた。革命党人が資金を集めて出版し，『蘇報』が刊文紹介し，影響は非常に大きかった。鄒容は蘇報事件〔蘇報案〕によって投獄され，1905年に獄死した。章炳麟（1869-1936，字・枚叔，号・太炎，浙江省杭州府余杭县人）は1903年に「駁康有為論革命書」を發表し，『革命軍』の序を書き，蘇報事件によって投獄された（前掲『中国近現代人名大辞典』322，645頁）。

History of the Zhao Family of Guanzhuang Village in Changzhou Prefecture (9)

Kaori Asanuma

9. Zhaoyuan reminisced

Zhaoyuan (Zhao Garden), a garden built by Zhao Liewen, was remembered by two of his relatives, both very knowledgeable individuals. The first, Deng Bangshu was the son of Zhao Liewen's wife's cousin and was also his daughter's husband. After having lived and studied in Zhaoyuan, Deng Bangshu became a metropolitan graduate. Impressed with Zhao Liewen's library named Tianfanglou Tower, Deng Bangshu later became a famous book collector. In fact, his immense collection was expensive enough to drive him to extreme poverty. The second relative, Chen Hongzhe, became the first female professor in modern China. Her grandmother was Zhao Liewen's sister, and her aunt Chen Deyin was married his eldest son. When young Chen Hongzhe spent her dark days in Zhaoyuan, finding no means to gratify her thirst for knowledge because of gender inequality prevailing at that time, Chen Deyin encouraged her to take an examination to study in America. This advice subsequently accorded Chen Hongzhe a successful academic career. Meanwhile, Chen Deyin herself stayed in Zhaoyuan, handling myriad home related problems of the resident families, including her own opium-addicted son and daughter-in-law as well as mistresses and progeny of her deceased brother, Chen Ding, a former member of the Hanlin Academy. Chen Ding was incarcerated because of his involvement in the Hundred Days Reform of Emperor Guangxu and died soon after his release from imprisonment. Zhaoyuan is now open to the public.